

第39回夏季大学「新しい気象学」実施報告

日本気象学会は、最新の気象学の普及を目指して、小・中・高等学校の先生方と気象を学ばれている学生や一般の方を対象とした講座を「夏季大学」と銘打って、毎年夏休みの時期に開催している。第39回を迎えた今年（2005年）は、「台風・集中豪雨」をテーマに取り上げ、8月5日（金）から7日（日）の3日間、東京の気象庁講堂で開講した。この期間中、東京は最高気温が33℃を超える猛暑が続いたが、会場は毎日100名を超す熱心な受講者でほぼ満席の状態であった（第1図）。今回初めて土曜、日曜に開催した効果か、初めて参加された方が半数を超えたこと、気象予報士の資格を持つ参加者が半数近くに上ったこと、が特筆される。

第39回のメインテーマ「台風・集中豪雨」は、昨年（2004年）の過去最高となった台風の接近・上陸や、新潟・福島豪雨や福井豪雨等による全国的な気象災害の多発を踏まえたものである。これらの災害を検証しながら、台風や集中豪雨のメカニズムや最新の予測技術・防災情報についての知識を深めることを目指した。また、過去の台風・集中豪雨の災害史や地球温暖化との関連など、多彩な角度からテーマを見つめることもできるようにした。最終日には、気象衛星センターで実際に行われている「気象衛星画像を用いた台風解析」を実習形式で実施した。講師名と講義題目を、第1表に掲げる。折しも台風第9号が石垣島付近を通過し、中国大陸に進んでいたこともあり、テーマがより一層身近に感じられる状況での開催となった。

先に述べた以外の受講者の概要を示すと、年齢は20代から80代まで多様、参加の目的は圧倒的に教養・趣味という参加者が多かった。関東地方の方が多いの

当然として、遠くは北海道や九州からの参加もあった。毎回、気象を学ぼうという意欲のある方々の年齢層の広さや行動力には驚かされる。また、参加者のうち気象学会員は4割程度であり、非会員のうち数名の方が学会に加入された。「夏季大学」が気象学会の普及にも役立つことがわかる。

全講義終了後に受講者から提出していただいたアンケートによれば、講義および運営全般は概ね好評であった。一方で、受講者の多様な気象知識のレベルに対して、いかに多くの方に満足される講義を企画するかという問題点も指摘された。対象を絞ったシンポジウムや講演会などの企画も考えられる。いずれにせよ、それらの批判も夏季大学への期待の表れであり、さらに充実した夏季大学をめざしたい。

2005年8月 教育と普及委員会



第1図 講義風景。

第1表 第39回「夏季大学」の講義題目と講師名。

8月5日（金）	8月6日（土）	8月7日（日）
「台風・集中豪雨の災害史」 和歌山地方気象台 饒村 曜	「台風のメカニズムと予測」 地球環境フロンティア研究センター 栗原宜夫	「衛星画像を用いた台風解析」[実習] 気象衛星センター解析課 西村修司
「2004年の台風と集中豪雨」 気象庁天気相談所 日野 修	「台風・集中豪雨と気象情報」 気象庁予報部予報課 永澤義嗣	
「集中豪雨のメカニズムと予測」 気象研究所予報研究部 吉崎正憲	「台風の長期変動とその影響予測」 防災科学技術研究所 松浦知徳	

講師敬称略